

B. S. Hoyle, D. Hilling
Seaport System and Spatial Change

山上 徹

(日本大学) 公アサ

1.はじめに

各国の港は、経済発達の段階に応じつつ歴史的に変化をし、つまり産業構造の変化を如実に反映していかねばならない。世界の海運、港は、今や大きな再編成・再開発の時期に直面しているとも云えよう。船舶に対応して港の機能を空間的に配置せねばならない。

地理的条件の相違はあれども世界各国一様に進展し変化するものでもなく、多分に経済発展段階と密接に関係し、ライフサイクルで特質を考察することも可能であると考える。

ここに紹介する書は、そのような問題意識に対しかなり寄与する内容で構成されていると考えられる。編者B.S.HoyleはSouthampton大学非常勤講師で、D.HillingはLondon大学の講師である。本書の公刊への道程を序文より引用するならば、

- 1) 過去25年間の間、海港の問題や類型、先進国、途上国、とくに成長パターンとの関係、海港システムの異なる国間の発達に関心をもってきた。
- 2) 東西アフリカに関しては、独自の研究活動が続けられてきた。それは世界各国の港の開発に関心をもち、つまり南北問題の両面から港の問題を研究してきた。
- 3) 世界的にも港に関する研究活動は、増加してきており、ここに集約化して公刊する意義があると判断した。

- 4) しかし港の経済事象は複雑・多岐な経済的事象から成り立つものである混合経済の場である。そのアプローチには、interdisciplinaryな研究を必要とし単に、土木工学を中心とする視角でことたりず、経済、社会と港の機能とのかかわり合いがあり、学際的研究が必要である。

その問題意識に挑戦しようとしたのが本書である。大筋の問題意識は共通しているといえるが、22の各論文自体は完全に一致しているとはいえない。しかし学際的研究により体系だったものを形成しようとする準備作業の1つとして高く評価できるものである。また本書は、世界港湾開発会議（World Port Development Conference、アムステルダム、1984年5月）に合わせて公刊されたものである。次に各論文のタイトルを示してみよう。

2. 本書の構成と概要

序文

- 1, 港の開発の空間的アプローチー (D.Hilling, B.S.Hoyle)
- 2, 海港開発－規模の問題－ (J.H.Bird)
- 3, 船舶運航業者の港経由活動と発展過程－ (M.C.Willingale)
- 4, 信号所, 港, 港なしの場所－ (H.C.Brookfield)
- 5, 港の諸問題と小島経済－南西太平洋を事例とし－ (A.C.Dunbar-Nobes)
- 6, 日本の海港－経済発展と国家介入－ (P.J.Rimmer)
- 7, 港の発展における自由放任主義－ホンコンを事例とし－ (David K. Y.Chiu, T.N.Chiu)
- 8, ナイジエリア港システムの発展－急速経済変化に対応して危機的管理－ (B.Dickinson)
- 9, 石油依存経済と港の開発－中東沿岸国－ (A.R.Walker)
- 10, 中国の港の発展－急速な経済成長計画下での調整－ (T.N.Chiu, David K.Y.Chiu)
- 11, 海港開発と国家の役割－ポーランドを事例とし－ (Zbigniew Taylor)
- 12, 地政学的港の開発効果－ (E.Stern, Y.Hayuth)
- 13, セバーンエスチュリー港の制約－ (D.Hilling)
- 14, 工業港の計画と景気上昇経済変化への問題－ (D.A.Pinder)
- 15, フオスのコンビナート港－地域成長センターか？－ (J.N.Tuppen)
- 16, 総合空間システムにおける内港の競争－北イタリアのジェノバボルト

- リィとサボナーバドゥー (E.Biagini)
17, カナダ西海岸のバンクーバー港の圧倒的優勢－ (C.N.Forward)
18, 開発途上地域経済における海港システムと農産品輸出－オーストラリア・
クイーンズランドの砂糖港－ (B.S.Hoyle)
19, ペルーの海港と輸送システムの構造的発達－ (J.B.Chapman)
20, 工業分散過程における海港の役割－南アフリカを事例として－ (B.Wiese)
21, リベリア海港の輸出類型の変化 (W.R.Stanley)
22, 海港の開発戦略 (B.S.Hoyle,D.Hilling)

索引

それでは、若干の論文のみについて概述してみたい。

1については、港は、一般的に「接続」もしくは「結節」の場であるとの考え方による研究として地理学のアプローチがある。海上の内陸輸送との接続点として港の整備で、いかにその生産要因が配置されているかの問題、とくにHinterlandとForelandの問題について論述してある。

2については、海港は、世界経済において必要不可欠であるにもかかわらず、港の研究は、第2次大戦に本格的に理論構築が開始されたことが指摘されている。本論文では、その遅れた要因を示している。1)港の経済事象の複雑性を指摘し、とくにHinterlandとForelandの接合という特殊な空間事象であることに存するとしている。2)海上と陸上との局地運送を中心とした荷役形態が原因であり、都市と結合の問題もあり、複雑な問題がある。そこで関係を略図などで示している。このような特殊性の上で、貨物荷役の技術的变化、港の計画問題を解明し、その規模を問題にしている。

6については、日本の港をDr.Peter Rimmerにより、分析されたものである。かれはオーストラリア国立大学（カウンベラ）太平洋研究スクール人文地理学部に所属しているが、オーストラリアー日本財団のフェローシップによりこの研究をなしたのである。

日本の高度成長を可能にした背景は、日本の風土に根ざす特殊性として、とくに徳川時代（1603～1867）を重視し、徳川時代の経験が、その後の日本

経済発展の原動力になっていると考えている。戦前（1945年以前）と高度成長期の特質を分析し、政府の役割の重要性を指摘し、政府が成長のための環境づくりに積極的に介入し、その役割の拡大化を指摘している。このようにわが国の港と経済発展の関係を日本の風土の特質から分析し、考察した貴重な論文ではなかろうかと考える。

10の中国港の開発に関しては、中国の国土は広大で、各地の自然条件や経済発展状況には、非常に格差がある。中国の交通・運輸業は経済資源の分布と発展に立脚して強力な交通網の建設を進めるべく港の拡張、新設、船舶の建設などを長期的計画で加速的に進めようとしている。1980年から始まった20年目標の年間総工業・農産品の指数は、4倍になることを旨としている。

しかし中国は、従前よりどちらかといえば、理念と現実を同一視しがちであり、高目標・高速度の追求に走りがちである。提供可能とする「モノ、カネ、ヒト」を上回った建設規模を想定しがちであった。技術革新のなかでもコンテナ化問題への対応が指摘されているが、港の役割を最重点に開発することが国際貿易の促進の側面からも必要なことを強調している。

3.あとがき

以上、述べてきたように本書は、世界の先進国、途上国における両体制を含み、グローバルな研究論文集であり、紙幅の関係で個別的にその概要を論じられない。過去、本学会においても広範な問題の研究がなされてきたが、共通テーマはその時々の社会的要請に示唆できるような問題の解明に主眼があったといえる。本書によれば、港の研究視角の展開過程を提示されているので、示してみよう。

- 1) 史的－起源的研究（HinterlandとForelandの研究）1956年～1969年
- 2) 経済的研究（港が工業立地上、港の開発投資の評価にとって最も経済的地点としてみとめる）1948年～1977年
- 3) 港と地域開発 1963年～1981年
- 4) 技術的志向（コンテナに対する一般雑貨、バルキキャリアの成長）1967年～1974年

5) 比較研究（例えば、その視点には港群間、海外港との比較、システムの比較研究がみられる）1962年～1978年

6) 未来志向（政策決定を推進し、それらの研究を促進する）1965年～1978年

7) 世界的システム（世界的湖を経由）1963年～1975年

8) ウォーターフロントからの撤退、成長の後退 1978年～

港の研究過程にも時代的要要求を反映するものであることが理解できる。このような研究領域を全て考察するには、個人的能力には限界があるが、港の研究視角を認識することも必要な時期にあるのではなかろうか。それにしても途上国が、今日その国際的な貧困格差から脱出するためには、みずから工業国となり、つまり国民総生産を増加させていかねばならない。しかし南北問題は、全世界的な経済構造の中にあり、単なる途上国の港の開発という対岸の問題から、地球上の全てを包含する世界史的な問題への問題意識が本書にあり、本書のもつ本来的な意識がそこに存在する。しかしながらその研究者のアプローチの多くは、先進国における資本主義的工業化の過程と港の開発をそのまま肯定してはいないであろうか。途上国の港の現状が、先進国の港よりも遅れすぎていることの結果とはみない考え方必要である。つまり先進国をつくり上げていった過程の盾の裏側をなす途上国が世界とともに歩みつつ、つくった結果ではなかろうかと考える。その場合にハード・ソフトの両面による近代化の問題解明が必要であろう。

本書は、このような広範なかつ構造問題への挑戦を試みられた貴重な書であり、港の研究視角も世界的システムの観点からの研究がとくに必要な時期にあると判断するので一読をお薦めしたい。

（John Wiley&Sons 1984, 481pp.）